

道

mi chi

開教の辞 世界救世教の誕生について

昭和二十二年八月三十日、宗教法人として、創立された日本観音教団並びに同二十三年十月三十日同じく創立された日本五七七教会は、今回自発的に解散し、右両会を打って一丸としたる新しき構想のもとに、本年二月四日立春の日を期して、表題のごとき宗教法人世界救世教の創立出現となったのである。

これは、非常に重大な意義があり、もちろん神の深き御旨によるのであつて、人間の意図ではないことはいまさらいうまでもない。いつも吾らが唱えるところの、霊界における夜昼転換の時期にいよいよ入ったからである。これも吾らが常にいうところの仏教の救いは夜の期間中であるから夜の消滅とともに観世音菩薩の御救いの転移進展となるので、一言にしていえば仏滅を意味するのである。したがって、観世音菩薩のお働きも救世主のそれとなるのは勿論である。すなわち化身仏であらせられた観世音菩薩はここに仮面を脱いで、ご本体である神のお働きとなり給うのである。

以上のごとく霊界が昼となる以上、これが現界に移写するにおいては、夜の文化は当然不用なものは滅び有用な物のみが残ることとなるのは当然である。そのみではない、長年月に渉る暗黒時代によって人類の罪穢れの少なからず堆積せる以上、その清掃作用が行われなくてはならない。右の滅ぶ

べき不用物とはこれを指していうのである。しかもそれと同時に昼の文化の建設が開始さるるのである。このごとき空前絶後の一大転機とは、何を指すのであろうか、まったく何千年否何万年以前より決定していた神のプログラムなのである。また別の言葉を借りていえば大規模な世界的破壊と創造が行われるのである。嗚呼このような重大時期に際会しつつあるいま、神の大愛はいかなる形に現れるかを知らねばならない。すなわちその具体化としては一切が滅ぶものと生き残るものとのいずれかに決定さるのである。しかしながら右は止むをえないとしても神の恩恵は、一人でも多く滅ぶるものを救わせ給わんとして、神の代行者を選び救世の大業を行わせ給うのである。またその使命達成の機関として運用されるのが本教であるから、本教の使命たるや実に大なりというべきである。この意味においていよいよ切迫せる最後の時期に当たつての活動こそ括目すべきものがある。その結果吾らの唱導する地上天国こそ最後の目標でなければならぬのである。(中略)

いま一つは観世音菩薩は、善悪無差別的の救済であつたが、いよいよ地上天国が目前に迫り来つた、今日ここに善悪を立て分け、善を育て悪を滅しなければならぬことになつた。いわゆる悪のトドメである。したがつて救いの力も決定的でなくてはならない、その力こそメシヤの揮わせらるる大神力である。嗚呼、慶賀すべき時とはなつたのである。



花鳥図 伝 銭選
 中国・南宋～元時代（13世紀）
 MOA美術館所蔵

中国花鳥画の伝統は古く唐代に溯るといわれるが、それが小景の鑑賞画として完成するのは宋時代のことである。特に北宋時代末の徽宗皇帝によって創られた画院の様式は、構図の安定、写生の徹底、余白の活用などを特色とし、静かな画趣が重んじられたが、南宋時代も進むと、画中の鳥獸の表現に動きが強調され、墨線が重視されるようになる。本図では、蜂をねらう野びたきの描写に、瞬時の緊張感が見事にとらえられており、梅樹や竹葉には、鋭く的確な線描が活かされている。色調に淡彩が目立つ点などから、南宋時代も末期以降の作と考えられる。

絹本着色 一幅 各25.7 × 25.7cm

《目次》

み教え	……	2
代表挨拶	……	4
感謝奉告 田川 I E	……	11
感謝奉告 名古屋 T I	……	12
立春祭・能登半島復興特別祈願祭(箱根)	……	14
立春祭(熱海)	……	15
シリーズ明主様(12)	……	16
感謝奉告 田川 M H	……	18
ブラジル信徒の信仰体験談	……	20
聖地NOW	……	22
連載『令和の平安郷建設』	……	23
シリーズ『幸せの種まき』	……	26

《令和6年 信仰課題》

浄霊の 奇蹟なくして今の世に

神さとするものあらじとぞ思ふ

【実践の誓い】

- 1 み教え集『明主様に倣いて』を拝読し、み心とお姿に倣います。
- 2 周囲に礼を尽くし、感謝と報恩に努めます。
- 3 浄霊を取り次ぎます。

代表挨拶

西村 正資

二月四日『立春祭』、二月一日『教祖祭』が、厳粛に執り行われました。

多くのご参拝の皆様は、身の引き締まる寒雨の中、梅園にきらめく満開の紅梅白梅に迎えられ、すがすがしいみ光を賜りました。

地上天国建設のご経綸の重要な時期をお迎えし、明主様がお進めになる新たなご神業に、「明主様と聖地に直結する会」一同、参加をお許しいただいておりますことへの感謝と、今後さらなるお導きを賜りますよう、お祈り申し上げます。

また、今年は、年初から大変厳しい浄化に遭遇しました。被害者のご冥福と共に、被災された皆様に想いを寄せ、安全と安心な日常生活が、一日も早く戻ることを心よりお祈りいたしました。

さて、この度の能登半島の災害ですが、年が改まった元日に発生したことは、神様のご意思が強く顕されたものなのでしょう。もし、そうであるならば、背後に秘められた神様のみ心を尋ねなければ、と思っております。そうした中、偶然とも思えぬ不思議なことに気付きました。

MOA美術館では、例年「全国児童作品展」が開催され、今年度も海外一ヶ国をはじめ、国内参加校数五八八七校、応募総数一九〇三四七点がありました。

受賞作品は、今年一月七日から美術館内に展示されています。その中でも特筆すべきことは、震災地石川県からの応募作品です。書写部門で四点、絵画部門で三点が入賞。特に書写部門では応募五三八八六点の中から、金沢大学付属小学校六年安宅絆きずなさんが出展した

『感謝』が「金賞」を受賞。内灘町立向粟崎小学校三年梅村佳菜子さん作品『生きる力』が、「ボーイスカウト日本連盟理事長賞」を受賞されました。

応募作品は、昨年届けられたものであり、審査も昨年に行われました。その中で受賞した『感謝』『生きる力』という作品が、偶然にも被災地からの応募であったことや、金賞受賞者のお名前が「絆」さんということとも不思議でなりません。皆様はいかがお感じでしょうか。

私は、この『感謝』『生きる力』『絆』は、被災地の純粋な子供たちの作品を通して、神様が私の目に映るように仕向けられたのかな」と、感じたのです。

『感謝』元日という節目に「昨年の続きが今年、昨日の続きが今日と、永遠に平坦に続くのではない」人生という命と自由を与えられ、日々護られていることに気付き何事にも感謝することが大切です。

感謝

小六 安宅 絆

生きる力

三年 梅村佳菜子

『生きる力』とは「社会や生活が大きく変わると予想される時代に、変化を前向きに受け止め、人生をより豊かにしていくためにどうすべきか主体的に考え出すことが出来る力」(文部科学省・学習指導要領より)

『絆』人が生活をする時「お互いがよく理解し認め合い、愛と信頼をもって支え合う」ということが大切です。

いささか「こじつけ」と見えるかもしれませんが、明主様がお働きになる「MOA美術館の企画」と「地震という大災害」、そして「年が改まった元日」という三拍子揃ったところに、このような文字が浮かび出たのも事実であり、なぜか偶然とは思えないのです。先日、ある方から、「世界救世教の教えを簡潔に話して下さい」「貴方自身が今特に大切にしている教えはありますか」と、質問を受けました。

二問目は一瞬、不思議な緊張を覚えました。「貴方は今、どのような生き方をしていのですか」と問われたように感じ、咄嗟に子供たちの作品『感謝』『生きる力』を思い出しました。被災地の子供たちに導かれた思いです。

「人は絶えず向上していかなければならない。それは人生の大きな課題」と、み教えいただいております。いろいろな学び方がありますが、私は周囲の皆様の姿に感動し、琴線にふれ「ああ、み教えにあるのはこのことだ」と、気付かせていただくことが多くあります。皆様のお姿に触れられること、本当に幸せです。

古賀集会所のATさんです。

当機関誌「道」昨年五月号に掲載された従弟Sさんのご守護奉告の、その後の感謝です。

前回の奉告では、ブラジルに移住していたSさんが帰国し独り生活をしていたのですが、昨年正月に意識不明で入院していることが判明しました。ブラジルに居る一人娘Nさんをようやく探し出し、日本語の通じない電話で「心配だが、今どうすることもできない」という娘に、祈りの大切さと信仰によって孝行が可能になることを真剣に伝えました。そして、世界救世教サンパウロ教会の住所を調べ伝えたところ、何とNさんが以前勤務していた会社が建設した教会施設と分かり、直ぐに入信、そして祈願と遠隔浄霊が始まりました。それ以降、Sさんは意識が戻り、回復に向かっているという喜びの奉告でした。

昨年六月、娘のNさんがようやくブラジルから駆けつけました。すぐに病院へ行き一五分という限られた時間の面会を許されましたが、Sさんは認知症のため我が娘の呼びかけにも誰か分らない様子でキョトンとしている状態だったそうです。

Nさんは、面会后、病院から先祖のお墓参りをされますが、そこで「今後お墓をどうするのですか」と、

和尚さんから尋ねられ、永代供養を勧められますが結論は出ず、その後も八日間病院に通い、そして帰国されました。

九月になり、Aさんに思わぬお金が入り、従弟さんの家のお墓の永代供養をされたのでした。

それから、Sさんの容態が好転し、一月には、自分のことは自分でできるまでに回復し、医師も驚いていたそうです。ブラジルのNさんとは、ライン電話で何とか会話ができたという、喜びと感謝の奉告でした。

Aさんの愛と誠の行動の賜物ではないでしょうか。従弟とはいえ、ブラジルと日本ということで疎遠期間も長くあったことでしょう。Sさんの一大事に、ご自分の年齢や環境等を顧みず「私が面倒を見なきゃ」と腹を決め、私的なことを度外視して、異国の家族との連絡、そして何から何まで、身边のお世話に徹底して取り組まれました。

当初、言葉が通じない姪御さんに、一体どうやって入信を伝えたのでしょうか。不思議でした。信仰経歴の長いAさん、言葉や理屈ではなく誠一筋、脇目も振らず一心に突き進まれ、それが通じたのです。一途な姿に明主様も感応されたのでしょうか。異国の姪御さんの近くに世界救世教が存在していたのですから、さらに驚きです。

また、親戚とはいえ、他家の先祖供養に大金を捧げ

ていらつしやいます。こうしたことは、理屈や計算で
できることではありません。このような誠のこもる行
為に、働かれぬ明主様である訳がありません。そのよ
うに感じるのは、皆様も同じではないでしょうか。

Aさんは従弟のために、労力と時間とお金をしっか
り捧げ、そしてお蔭をいただいたのは従弟のSさんで
あり、姪御さんをご先祖様です。物理的に見つめれば、
Aさんが貴重なものを費し、Sさんは失うもの無く良
い結果をいただいたのです。

さて、誰が一番「得」をされたのでしょうか。

この意味を正しく理解できることが、信仰ではとて
も大切で、神様の心は、人間の欲得とは真逆のことが
多いのです。命も時間も物質も、元々神様が準備され
たものです。人間がそれをどのように扱うかをしっか
りご覧になつています。今回のことで神様から一番お
褒めをいただくのは、もちろんAさんだと信じます。
利他の行為は形を変え、必ず「運命」に、大きな「恵
み」となつて還るとみ教えいただいています。

「欲張つて欲の無い人」になつてはいけませんね。A
さん一人の誠の行為によつて、周囲の方々、皆が幸せ
を許されたのです。

私たちは「浄霊」を通して「神様のご存在」を見え
る形で知らせ、このような『真理』を幸せへの近道と
して多くの人に伝えたいのです。

田川布教所のMTさんです。

昨年一〇月一日、聖地秋季大祭に参拝されました。

当初、八月の祖霊大祭に参拝を勧められたようですが、
都合がつかず、一〇月の聖地参拝を決めました。その
後に気付いたのは、丁度それが、亡父の一七回忌（仏
教）にあたる月であつたそうです。

聖地での秋季大祭、そして祖霊月次祭、年祭慰霊祭
に参列されました。海外から来聖された大勢の参拝者
と共に、今までにない喜びの参拝が叶い、亡父もきつ
と喜んでくれていると感じたそうです。

聖地へのご参拝については、ある先達の話思い出
します。「聖地は行きたいからと言つて、いつでも行け
る所ではない。例えば天皇陛下に会いたいから、皇居
へ行けば会えるということではないでしょう。それが
「神様、明主様にお会いする」のですよ。参拝しない
というのも厳密に言つと、神様が許されないのです」
と。

MTさん、ご参拝が許されたのです。良かったです
ね。そして霊界のお父さんもです。聖地参拝を勧めら
れたという事は、霊的に門戸が開かれ招かれたとい
うことではないでしょうか。おそらくお父さんが嬉し
くてすぐに反応され、ご自身の命日に合うように仕向
けられたのかもしれない。

その時は気付かなくても、後になって見えない世界からの働きかけや導きを感じるものがよくあります。そのような時は、すべてがうまくいっている証だと思います。MTさんが「すべて明主様に導かれていたような気がします」と、奉告されていました。

聖地参拝は、神様のみ許もとに人間が足を運ぶという、信仰の基本姿勢ですね。さまざま祈りも、ご奉告や感謝なども、奉げる側が足を運ぶのは、順序礼節として本来の道筋です。多忙の時や遠路、厳しい環境等の中での参拝であればあるほどその尊さも増し、明主様も感応されるのではないでしょうか。時には「もし、自分が明主様の側であつたら、どのように感じるのか」と、謙虚になり、自分を見つめることも大切です。

今後とも聖地参拝を大切に心がけて下さい。その都度、きつと新たな気付きがあると思います。

三重グループのTMさんです。

今年一月二日で、信仰年数の還暦をお迎えになられたそうで、誠におめでとうございます。

中学三年生の時に、家庭内の問題を抱え、苦しんでいらつしやるお母さんを支えたいと、家族に内緒で入信されたのです。とても親孝行な娘さんでしたね。後日そのことを知られたお母さんは、とても嬉しく心強かったことでしょう。

それから六〇年「何のお役にも立てず、お蔭は数多くいただいたてきました」と、とても謙虚に奉告されていますが、私の知る限りでも、今日まで多くの信徒のリーダーとして様々な場で活躍をされてきていらつしやいます。でもTさんからは、自然体の中にも秘められた深い信仰の年輪と爽やかさをよく感じました。

明主様は、ご用にお使いいただいた時『感謝よりほか何もない。少しでも自分がやったと思つたら、観音様はもうお使いにならぬ』『名誉心などであると、反対の結果になる』と、み教えいただき、私もそのような心がけておりますが、なかなか難しい課題です。

今回の奉告は、昨年末の聖地における『御生誕祭』参拝の帰路での出来事でした。名古屋駅で階段を下つていた時、瞬間に意識が無くなり、数秒後階段を滑り落ちていくことにかすかに気付き「明主様！」と心の中で叫んだそうです。すると直後右手に居た男性が背後から抱き上げて下さり、危ういところを助けられました。その男性にお礼を言うと、直ぐどこかに行つてしまわれたそうですが、「もしかしたら、明主様のお使いの人だったかも」と、感謝されています。

明主様は、Tさんの今後の働きを「期待されているのでしよう。」

私たちの魂は、明主様と強い霊線で繋がれていますから、イザという時、心の内であっても「明主様！」

と叫ぶことで、その中身をご奉告する間が無くても、明主様は一切をご承知になり、導いて下さいます。

今日まで、そのような奇蹟を多くの信徒の体験談を通して知っていましたし、私自身も何度か経験があります。本当に有難い立場を許されているのです。

今後のご活躍を、お祈りしております。

名古屋栄グループのY.T.さんです。

昨年の御生誕祭、そして元旦の新年祭に聖地参拝が許され、その喜びを奉告されました。

御生誕祭には、車酔いすることも無く、素晴らしい聖地の景観に幸せを感じつつ、祭典に臨まれています。しかし、祭典が始まり「天津祝詞」が奏上されると、突然額の奥が痛み始めたそうです。しかし、心はなぜか「帰ってきた」という感覚が湧きおこり「明主様のみ光が私を浄化し、痛んでいるのだ」と、受け止めることができたところで、痛みは治まったそうです。普段親から「すべての物事は、明主様からの愛と思い、事実を受け入れる」ことを教えられているようで「想念」の大切さに改めて気付いていらつしやいます。

新年祭では、先回とは逆に、朝から咽喉が腫れ、車酔いもあったそうです。しかし、今度は祝詞が奏上されている時、御神殿に差し込む初日の強い光に「懐かしい」という思いが浮かんだとのこと。そのことを帰

路再び父親に話すと「自分も、霊界と現界の隔てが無くなったような新しい感じがした」と応えています。

「先祖様が明主様のもとに還ることができ、み光に包まれ、その喜びを伝えてくれたのだ」と思えて「聖地参拝において良い学びをさせていただいた」と奉告されています。

素晴らしい親子の会話ですね。互いにそのような素直な会話ができることは、普段の生活もそうなのでしょう。家庭天国を見るような思いです。

二度の聖地参拝で、自分の魂で感じたことを、そのまま素直に受入れることを大切にされています。

「すべての物事は、明主様からのお気付けと心から思う」と受け止められ「浄霊を通して大勢の人を救うご用にたずさわり、自分を高めていきたい」と、今後の抱負を奉告されました。嬉しいですね。明主様が「楽しみだ」と、一番お喜びではないでしょうか。

信仰四世の若い世代が、このように「神様の存在」を感じ取り、人生のあり様を純粹に求めていく姿こそ、今年私たちが信仰課題とした『浄霊の奇蹟なくして今の世に神さとするものあらじとぞ思ふ』のお歌の心ではないでしょうか。すでに四世がこのように成長されていることに感動を覚えます。

「神様の存在」を知ることには、人生にはとても大切なことです。Yさんのような純真な若者が増えた未来の

社会を想像してみましよう。きっと明るく豊かで楽しい社会に違いありません。

私たちも、今年の信仰課題「浄霊」を周囲に取り次ぎ、真理が通り、善が行われ、すべてが美しくなる社会実現に、ささやかでも参加させていただきましよう。明主様の愛とみ光が皆様を包み、喜びあふれる日々が許されますよう、お祈りさせていただきます。

水晶殿と東山荘拝観のご案内



今年70年を迎える水晶殿



教祖記念館・東山荘

「道」68号の訂正とお詫び

1. 令和6年信仰課題(4頁)のお歌の文字が消えていました。
神さとするものあらじとぞ思ふ

2. 代表挨拶で、東大阪グループOA様感謝奉告への文章中、姪っ子様のお名前の遺児のお名前

9頁下段(誤)MJ君

(正)MJ君

ここにお詫びし、訂正させていただきます。編集子

明主様が「天与の景勝を楽しんでもらいたい」との願いを込めて建設されてから、水晶殿は、今年、七〇年を迎えます。水晶殿は、令和六年一月より、土曜と日曜に一般公開されています。開館時間は一〇時から一五時です。

また、国指定有形登録文化財の東山荘は、毎月第三日曜日(六月のみ第四日曜日)に特別公開されます。入館は、一一時と一三時三〇分の二回で、所要時間は約一時間です。入館料は五百円。一回の定員一〇名です。

拝観希望される方は、事前に希望日、氏名、人数、連絡先を明記の上で touzansouhozonkai@gmail.com 宛にお申込み下さい。

詳細は、いづのめ教団瑞雲郷管理課まで(〇五五七―八五―三二六三)

感謝奉告

神様に向かつてまっすぐに

田川布教所 I E

コロナ禍の前は、布教所には奉仕や行事で参拝していました。コロナの流行と、左手の帯状疱疹の後遺症の痛みで信仰不信になり、何度か所長に信仰をやめると言っていました。所長と話した後もやめきれないでいる自分にイライラして、布教所から遠のいていました。

耳が遠くなり、廊下を歩いていても身体が思うように動きません。人に助けていただくばかりの日々を過ごしている私は、精神的に不安定になっていました。

必要以上に外出することもなく「もう死んだほうが楽になる」とまで思いつめている私がいましが、それでも帯状疱疹になった時から、毎日、朝夕のみ教え拝読は欠かしたことはありません。不安定な心の自分は、神様、明主様、ご先祖様、亡き友人や、傍にいてもいてくれる友人に、不満をぶつけていました。そんな毎日でも、一日に何度となく自然にみ教えを拝読している自分に気付いたのです。拝読している時は無心になっていることに気付き、それからは信仰不信も少

しずつなくなり、神様の存在が信じられるようになりました。

娘に「お母さんは世間知らずよね」「もう少し以前のようにならね」「残り的人生後悔するよ」「お母さんの性格ではきつと後悔するから、外に出ないかね」「布教所に行くことから始めたら」と言われ、
「そうよね、原点に戻ればいいよね」と気付きました。

令和五年一二月一七日の布教所での御生誕祭の時、世話人のAさんに誘われた時は「いぶん迷いました。適応障害で大勢の人の中に、長くいることができないので、不安と緊張で、布教所に行くことをためらっていました。」

一五日の夕拝の時「神様に向かってまっすぐ行きなさい」と言う声が聞えてきたのです。亡き友人も「E、行きなさい、後は私たちが見守るから」と言ってお下されたように思えたので、決心して一七日の御生誕祭に参拝しました。緊張と不安の中、神様や明主様、亡き友人との約束で最後まで布教所にいることができました。この時の喜びは、何と言葉で表現して良いのか分かりません。途中で浄化した私を、IさんやAさんに助けをいただいたお蔭で、最後までいることができたことに心から感謝いたします。「本当に行って良かった」と思いました。

神様や明主様、亡き友人が守って下さったことへの

感謝と、神様がいらっしやることをハッキリ認識することができました。

これからのくらしい生きていけるか分かりませんが、残りの人生、神様や明主様、亡き友人に素直な心で前向きに努力していきたいと思えます。このような私です。皆様方には、お世話をかけると思いますが、よろしくお願いいたします。

感謝奉告

信仰と健康の転換点に立つて

名古屋栄グループ T-I

私は、一五年程前より、三月、四月になると花粉症の症状が出て、頭が痛くなり、次に肩と腰が重く感じ、そして痛みに襲われるという、その繰り返しでした。五月になると症状も緩和してきて良くなりますが、昨年、鼻血が三回も出て、その内一回は大量に出ました。その頃はメシア教に所属していたので、そちらの先生からは「浄霊はしてはいけません」と言われていました。しかし、自分の身体は自分で守らなければと思いません。

そのような状況の中、メシア教の先生から「グループの集会に出て、その体験話をグループの人に伝えて

下さい」と言われました。私は、「浄化中ですから」と伝えますと「来ていただけなのなら家に行きます」と一方的に言われたので、私は「家に来ていただいてもお会いするつもりありません。私は、浄霊がないと生きていきません。それから教主様のお話は信用できませんので」と言ってしまった。後で、教会に行きづらくなってしまうと思いましたが、自分の考えを素直に話せたので良かったと思えました。

その後、三月から毎日真剣に自己浄霊をしましたが、五月になっても全く変わらず、腰、お腹が重く、体調は良くなりませんでした。また主人は、二〇年程前から血糖値が少し高かったのですが、薬は使わずにいました。そして、週に四〜五日の散歩に心がけ、六ヶ月に一度検査に行っていました。主人は、五月に検査を受ける予定でしたが、体重が少し増え、何か自分でも心配になったのか、普段は私が主人に浄霊をお取り次ぎしていますが、四月からは自己浄霊もしたい（浄霊体験がないため）と言い、毎日ご神前で自己浄霊を始めました。

そのような中、和田先生がメシア教を辞め、名古屋に帰って来て、「明主様と聖地に直結する会」に移られたと聞きました。五月一六日は主人の検査の日でしたが、メシア教の信者さんと二人で、和田先生に会いに行きました。私は、先生にお会いして、一筋の光が見

えてきたように感じ、気持ちをワクワクさせながら、自宅に帰りました。

家に帰ると、検査を終えた主人が帰宅していたので、「検査の結果はどうだった」と聞くと、「今までにない程の数値で、血糖値は8.3だった」と、とてもショックを受けていました。これでもう自己浄霊をしなくなってしまうのではと思っていると、主人が「今日から仕切り直しだ」と言って、ご神前で浄霊を始めました。次は三ヶ月後に検査を受けることになりましたが、薬無しの中で散歩の距離を1km増やし、4km歩くことを日課として始めました。

六月一九日、名古屋での初めての「聖地直結の会」の集会に参加して、そこで入会をさせていただきました。私がメシア教の先生に自分の考えを話した時期と、和田先生がメシア教を辞められた時期とが同時期だったこと、また、先生が「聖地直結の会」に移られ、私たちをお導きしていただけたこと、すべては、明主様がお働きくださったことだと、とても感謝しております。六月末頃より、主人も私も体重が少しずつ減り始めました。私は、七月末には体重が2kg減り、身体もすっかり軽くなり、元気になって、やる気も出てきました。八月八日、主人が検査に行くと、血糖値が7.0まで下がっていました。お医者さんが「薬無しで、よく頑張ったね、良かった、良かった」と自分のことのように手

を取り喜んで下さいました。驚くことに、一月七日の検査結果では、血糖値は6.5まで下がっていて、お医者さんからは「もう、ほぼ標準ですよ」と言われました。主人にとって、貴重な浄霊体験をさせていただいて感謝しております。

この体験を多くの方々には伝えなさいとの、明主様からのメッセージと受け止め、この感謝奉告となりました。誠にありがとうございました。



満開を迎えた梅園上の寒桜

立春祭に併せて能登半島復興特別祈願祭を斎行（箱根）



ご経綸の節目である立春のみ祭りに、併せて能登半島地震被災地の復興の祈りを捧げた



雪降る中、参拝に臨んだ信徒は、明主様にお応えさせていただこうと熱い祈りを捧げた
健康問題の解決に取り組む東方之光の信徒は、進みゆく神仙郷建設と共に大
浄化時代の中での救いの使命を確認。改めて、明主様の「救いと建設」のご
神業に挺身する誓いを捧げた。

瑞雲郷に紅梅、白梅が咲き競い、馥郁たる梅の香が立ち込める中、立春祭厳かに（熱海）



春の息吹にのせて、利他愛の実践の誓いと能登半島地震被災地の復興を祈る



明主様のお姿に倣い、利他愛の実践に務めることを確認

瑞雲郷に紅梅、白梅が咲き競い、馥郁たる梅の香が立ち込める中齋行された立教祭。昭和7年、明主様の能登半島七尾の浄化者に尽くされたご事蹟をあげ、「救世救人」—さらなる利他愛の実践に向かって邁進する決意を固めた。

シリーズ 明主様(12) “順風満帆”

無償の愛

岡田商店は、追風を帆の背いっぱいを受けて、順調に船旅をする人生航路そのものであった。順風満帆とはよく言ったものである。商品は作るそばからどんどんさばけるし、資金繰りもうまくいっている。作ること、売ること、いっさい万事が順調である。自力で興した事業がごく短期間に大成功を収めたのであるから、教祖が自己の才能と手腕に満々たる自信をいだいたのも当然といえよう。そして、人間の幸、不幸は、すべて本人の努力と才能が決定するといふ信念はいよいよ確固たるものになっていった。とともに、若い時からの唯物、無神の考えも、ますます強くなっていったのであった。

教祖は四〇歳くらいまで、神仏に手を合わせたことがなかった。自分が手を合わせないというだけではなく、他人の信仰している姿を見ると、そういう人が愚かに見えて仕方なかった。神社の本体はといえば鏡か石か、紙に文字を書いたようなものである。それを人間が拝むなど、およそ意味がないと思っていたし、また、仏にしても、観音とか釈迦、阿弥陀などの姿を刻んだり、紙に描いたりしたものである。こんなものも人間の空想の産物であるから、な

おのこ意味がない。いづれも偶像崇拜以外の何物でもないというのが教祖の持論であった。そのころ、教祖が共鳴したのはドイツの哲学者ルドルフ・クリストファ・オイケン（一八四六年～一九二六年・一九〇八年ノーベル文学賞受賞）の説であった。すなわち人間が偶像を作って拝むのは、人間には何かを礼拝しなければ満足できない本能があるからで、それは単なる自己満足にすぎない、というのがその説であった。

しかし教祖はそのころ、「救世軍」へ定期的に寄付をしていた。そのため、救世軍の牧師がたずねてきて、

「救世軍へ寄付する方はたいいていクリスチャンであるが、あなたはクリスチャンでもないのにどういふ動機から寄付をされるのですか。」

と質問したことがあったので、これに対し、

「救世軍は出獄者を悔改めさせ、悪人を善人にする。従って救世軍がなかったとしたら、出獄者の誰かが私の家へ盗みに入ったかも知れない。然るにその災難を救世軍が未然に防いでくれたとしたら、それに感謝し、その事業を援けるべきが至当ではないか。」

と理由をはつきり説明したのであった。

このように無神論のコチコチではあったが、人のためになる善行はしたいという気持ちは人一倍であった。

この時代、教祖の人に尽くし、世の為になろうとする大

きな愛情を伝えるエピソードは数多い。

身近な例からあげると、その一つは妻・タカが結核を患つた時に示した愛情である。明治四一年（一九〇八年）、結婚してから一年ばかりたったころの話である。さっそく医師にみせたところ、

「この病気には薬がないから、まず空気の良いところへ転地して、気長に療養するよりほかに方法は無い。」

という医者しんたんの診断であった。当時、結核は不治の病とされ、遺伝すると考えられていたから、家族や親戚は本人のために家に返すことを勧めた。教祖も一時その気になったが、どうしても納得がいかなかった。どんなことがあっても助けあつて添そいとげるのが夫婦の道である。教祖には自分の結核を克服こくふくした自信があつた。それに正しい道を歩む人間に結核が伝染でんせんするはずはないという確信のよくなものが湧いてくる。タカの結核は誰にも感染かんせんすることなく、菜食療法によつて三、四か月のうちにみごとに完治したのである。

また、これは一時教祖の家で働いていた女性の話である。一六、七歳の娘であつたが、病気になつたので千葉県の実家へ帰した。ところがしばらくして不意にたずねてきた。

尋ねると、帰つてから後しだいに病状が悪化して、ついに重症の結核と診断されてしまったというのである。ところが非常に貧しい家庭であるので、養生をするどころではない。邪魔者扱いをされて、「働きに出る。」と言われて出てきたという。一部始終を涙ながらに語る娘の様子を見ている

うちに、教祖は心を動かされ、

「そんな身体で働くなどはとんでもない話だ。すぐ実家へ帰りなさい。その代わり食扶持くいぶちと医療費を、お前の生きている間は、必ず送るから。」

と約束をした。教祖はそれから毎月一五円ずつ娘のもとへ仕送りをつけたのである。

ところがそれを聞いた親戚や知人は、

「その娘の肺病が治る見込みがあるならいいが、死ぬに決まっている者を援たすけてやったところで、つまらないじゃないか。早くよした方が利口りこうだよ。」

と忠告するのであつた。しかし、初めから損得を度外どがいしてかかつている教祖である。

「私は恩を着せて代償だいじやうをもらう気はいささかも無い。人を世話して恩返しを期待するなどは一種の取り引きで、まるで恩を売るよくなものだ。だから、そんなものは慈悲じひでもなんでもない。善人らしく見せる一種の功利こうりである。ただ私は、あんまりかわいそうで見ていられないからそうしたままで、つまり、自然なんだ。私はそれで満足しているんだから、いいじゃないか。大きなお世話だ。なるほど、あんた方から見れば馬鹿と思うだろうが、馬鹿でもなんでも結構けつこうなんだよ。」

この答えを聞いて、忠告をした者たちは呆あきれて黙つてしまふのであつた。

…次号に続く『東方之光』（上巻）より

感謝奉告

感動の聖地参拝を許されて

田川布教所 M H

昨年一二月、熱海聖地の御生誕祭に参拝させていただきました。前日には浅草の御生誕地にも行くことができ、ご守護いただきましたので、ご奉告させていただきます。

Aさんから声をかけていただき、すぐ行きたいという気持ちになり、御生誕祭に参拝させていただくことを決めました。所長から、「新幹線と飛行機、どっちがいい？」と聞かれたので、私は「飛行機がいい」と答えました。「飛行機なら時間があるから、どこか行きたい所ありますか？」と聞かれたので、私は「浅草の御生誕地に行きたいです」とお願いしました。

出発前日の二日は雪が積もり、二二日の朝に道路が凍結したら空港まで行けなくなるので、前日に北九州空港の近くのホテルに一泊し、翌日二二日に飛行機で東京に向かいました。羽田空港に着いて食事をした後、浅草の御生誕地に行きました。浅草駅に着いてバス停に向かう時、ロッカーに入れた荷物から杖を出すのを忘れたので大丈夫かと思いましたが、不思議と杖

が無くても大丈夫で、普段歩く時は腰が少し曲がるのですが、その時はまっすぐ立って歩けました。

御生誕地に着き、

お参りさせていただきました。そしてここで写真を撮ったりして、ゆっくり過ごさせていただきました。その後、隣にある東方之光のセンターに上がらせていただきました。とても広くて誰もいないご神前で、所長と二人で

ご参拝させていただきました。参拝が終わったら、嬉しくて自然に涙が出て、感動で胸がいっぱいになりました。しばらくその場に座り、何回も何回も心の中で、大神様、明主様、ありがとうございます。



明主様産湯の井戸



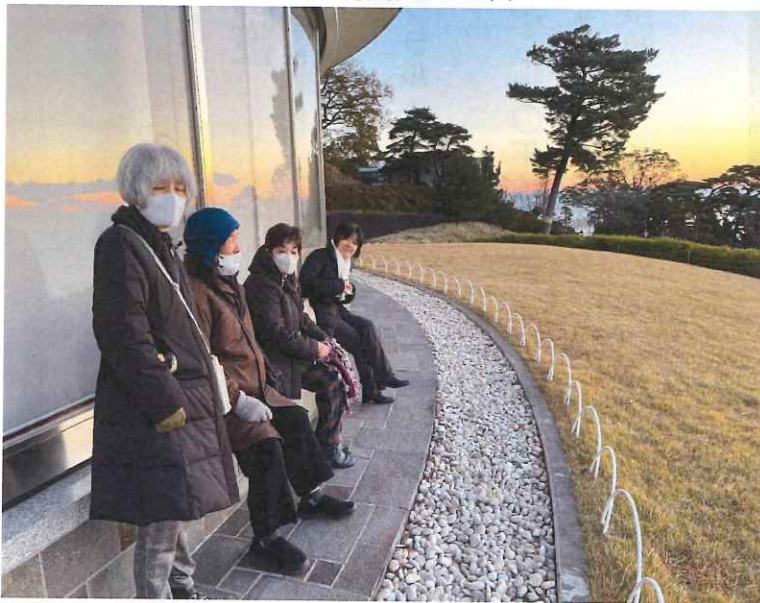
「東方之光」碑前にて Mさん



生誕地碑



Mさん撮影の日の出



田川布教所の皆さんと水晶殿にて

たと祈りました。

御生誕地でゆつくりさせていただき、次はバスで観音寺に行きました。岡田家のご先祖様のお墓にお参りし、ここでもゆつくり過ごすことができました。

その次もバスで浅草寺に行き、お参りしましたが、ゆつくり過ごしているうちに、すっかり暗くなってきました。浅草寺、五重の塔もライトアップされて、きれいでした。まわりは外国の観光客でいっぱいでした。

そして熱海まで新幹線に乗り、着いた時は、本当

に真っ暗でした。

翌日二三日は、新幹線組の皆と一緒に五人で、聖地からの日の出を見に行くことになっていましたので、ホテルに直行しました。

朝、六時にホテルを出発しました。救世会館までタクシーで行きましたが、時間が早すぎたので、まだ門に鍵がかかっていました。門が開いて、稲妻階段から水晶殿に行きました。風が強くて寒かったのですが、水晶殿の外から皆で日の出を待ちました。太陽が少しずつ上がるのを見ていると、とてもきれいで感動しました。

皆、写真を撮りました。田川布教所の信者さんたちにラインで写真を送ったら、皆喜んでくれました。

その後、参拝までに時間があつたので、美術館をゆつくり観ることができました。

時間になって、御生誕祭の参拝をさせていただきました。初めて聖地での御生誕祭に参拝できたので、とてもうれしかったです。

私にとって今回の参拝は、感動の聖地参拝になりました。大神様、明主様に感謝申し上げます。ありがとうございます。

治癒の見込みのない視力が回復 心の眼も開かれた喜び！

ピトウバ教会 ジェルーザ・カブラル・ベゼーラ

入信が許されて二〇年になります。今から一〇年前に、強烈な頭痛と目まいに襲われ、目を醒ますと左目が見えないことに気が付きました。私は自分に何が起こっているのか理解できず、混乱しました。

目が酷く痛み、移動するのが困難だったにも関わらず、その日は家事など日常的な仕事を全てこなし、翌日ようやく眼科医に診てもらおうと「眼の静脈内に血栓が詰まり、その結果、左目の視力を失った」と診断されました。

あらゆる検査を受け



た後、医師から「治る見込みはない」ことをはっきりと告げられました。もう左目は見えるようにならないと言うのです。医師はさらに「右目にも同様なことが起こる深刻な危険性がある」と付け加え、私に専門医を紹介してくれました。

医師の診断を聞いた時はとても驚きましたが、心配しつつも、取り乱したり、弱音を吐いたりするようなことは一切ありませんでした。なぜなら入信以来二〇年間数多くの奇蹟が許される中で、明主様を絶対的に信じることを学ばせていただいたてきたからです。私はこの浄化を神様の御手にお委ねし、右目だけでの生活に慣れるよう努めました。

専門医の指示に従って、さらにいくつかの検査を受けると、左目の中心にある静脈が破裂し、そこから出血していることが確認されました。症状が深刻だったため、専門医からはすぐさま手術を受けるよう指示されました。最初の手術を受けましたが、術後の回復期に再び静脈が破裂し出血したため、改めて手術を受け直さなければならなくなりました。

さらに二〇一三年の下半期を通して、私は全部で五回の手術を受けました。また網膜がすでに壊死していたため、眼球だけでも保護しようとレーザー治療も複数回受けました。

治療期間中、私は自己浄霊に毎日取り組んだほか、信者さんからいただくと共に、私も隣近所の方々に取り次がせ

て頂きました。

担当の医師は、私の素晴らしい回復ぶりを認める一方、網膜の壊死を理由に「左目の視力は戻らない」と断言していました。移動が困難だったことから、浄霊センターでのご奉仕は減ってしまいましたが、月次祭への参拝は欠かしませんでした。

当時、私はサルバドル市の一地区に住んでおり、最寄りの布教拠点が自宅から40kmと離れており、すぐに行ける距離にはありません。そのため、私は近所のお宅に浄霊訪問するように取り組み、週に一度、多くの信者さんやお友達を自宅に招いて浄霊集会を開きました。こうした活動を通して多くの奇蹟が許され、大勢の方々が靈性に目覚め、世界救世教に入信されました。

御神前で、頭をあげ、目を開けると……

二〇一七年五月の月次祭。私は祭典の数時間前に浄霊センターに着き、御神前に入り、大神様、明主様としつかり繋がることのできるよう、御神体の真正面に座りました。

そして集団浄霊を頂いていた時のことです。私はいつものように眼鏡を外し、頭を深く垂れていましたが、強い目まがいだったので、頭を上げ、目を開けると、何と御神体とご浄霊を取り次ぐセンター長の姿が見えるではありませんか。

自分に起こっていることが信じられず、右目を手で塞い

で、左目だけで見てみましたが、それでも御神体と私に向ってご浄霊の手をかざすセンター長の姿がはつきり見えたのです。私は感動で胸がいっぱいになったものの、誰にも言わず、最後まで席を立ちませんでした。

月曜日。自分に何が起こったかを明かさないうまま、担当の眼科医の診察を受けました。医師は検査を始めるや、顔をほころばせながら私に「もしかして、見えてます？」と聞きました。容易には信じられないといった様子の医師に私は「完璧に見えています」と答えました。

検査の結果、医師は「網膜の壊死が確認されていたものの、身体が新しい網膜をつくったために、視力が回復したのでしょうか」と、感心しながら私に言いました。

どんなに困難な時でも、真心と感謝の気持ちを含めて、ご浄霊やご奉仕に励んできたことで、こうした大きな奇蹟が許されたのだと理解させて頂いております。

物質世界に視界が広がっただけではありません。私の心の眼もまた開かれ、より広い視野を持てるようになり、人に対して今まで以上の思いやりと感謝の気持ちで、差別なく接することができるようになりました。

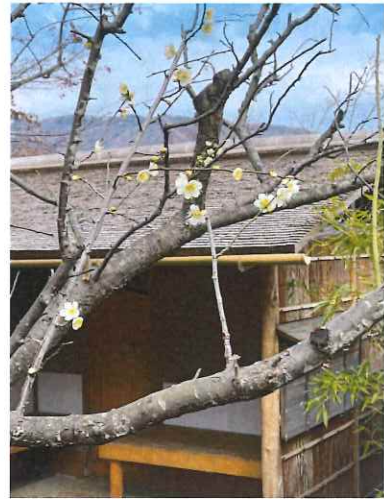
大きな奇蹟をいただき、この素晴らしい体験を多くの人と分かち合う機会が許され、大神様とメシヤであられる明主様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



霜よけに覆われた苔庭



椿咲く石楽園



山月庵と白梅

冬と春
紅白の饗宴



真和亭と立春の雪景色



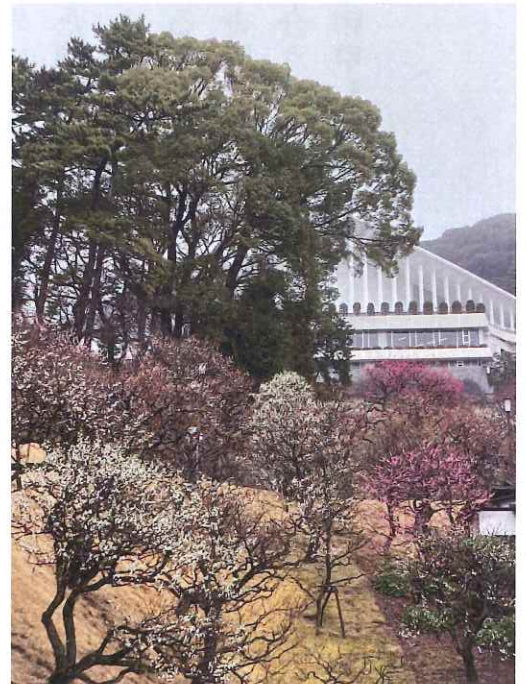
箱根美術館・架け替えられた八つ橋



広沢池畔に咲く水仙



開花始まる春秋庵の白梅



今を盛りに匂い立つ紅白梅

「令和五六七の年」

高頭 和生

「世界中の人の幸せのための平安郷建設」

「世界中の人が幸せになるために、平安郷建設を通して明主様にお使いいただき、神さま中心の生き方がゆるされますように」

昨年秋、五十代の女性信徒が「これから毎月、平安郷月次祭のご奉仕させていただきたい」と心に決められ、毎月一泊でご奉仕にいられています。彼女には四人のお子さんがいますが皆さん子供のころ入信し、現在には、ほとんど未活動でした。先月、次男は平安郷への参拝が許され、仕事や生活の悩みに対して、神さま中心の受け止め方を学ぶことが許されました。長男は昨年結婚した奥様と一緒に立春祭の参拝が許されました。長女は、今年になってからの浄化を通して、親子で神さまのお働きについて話をする事が許され、感謝の大切さを学んでおります。彼女は、「信仰は伝えようとするのではなく、神さまがお働きになると自然と伝わるのですね」と、自分の願いを叶えてもらう信仰

から、神さまのお働きを感じ神さまを中心とした信仰への気づきが許されました。平安郷では最近、このようなほのぼのとしたご守護の報告を聞くことが増えています。

三十年前の、平成六年六月六日に大弥勒御本尊が御奉齋されました。翌年、ブラジルではガラピランカ聖地が竣工され、その翌年の平成八年は、タイ国サラブリの聖地が竣工いたしました。そこからの数年の間に教線はヨーロッパやアフリカへと世界中に拡がりました。日本国内でも、信徒の喜びの教線は著しい勢いで拡がりました。

この三十年間の平安郷建設に伴う神さまのお働きは、平成時代の建設として、顕わしてくださったご経緯であり、明主様が私たちにわかりやすく神さまのお働きをお教えくださっているようです。残念なことに平成二十二年、大弥勒御尊像は御巻上げとなり、翌年のみろく塔を茶室の待合の裏手に安置されたこの時期から、奇蹟やご守護体験をはじめ、信徒の喜びの声が少なくなりました。

世の中に目を向けてみると、大きな社会変化が起こっています。産業革命以降、百年以上かけて起こった時代性的変化が、今は数年で起ころうとしているといわれています。

ご存じのように産業革命は十八世紀後半、蒸気機関の発明により、農業中心の社会から工業中心の社会へと産業が大きく変化したしました。その変化は時間をかけて世界中に拡がり、大量生産、大量消費、大量廃棄という物質的豊かさ中心の資本主義経済が進化いたしました。人間の価値

観も、物やお金を所有することが豊かさや幸せに直結し、生きがいや人生観を大きく変化させました。その結果、資源は枯渇し温暖化や貧富の格差、そして所有や権利を独占しようとする支配層の目的遂行のため争いが絶えません。ところが現在、インターネットを介した情報の拡散と共有、人工知能の進化やドローンを利用した流通革命、新エネルギーや宇宙開発などがこの数年急加速し進化しています。今までの歴史的变化の延長線では予想できない社会変化が起こると言われています。当然、私たちの価値観も大きく変化することでしょう。多くの経済学者や技術者がこのようなことを訴えています。

私たちは、そして私たちの子供や孫たちは、物心ともに価値観の大きな変化を向かえることになります。変化後の世の中はどのようなようになってゆくのでしょうか。その時代に生きるため私たちはどのような人間になっていることが大切なのでしょうか。そして、いま始まった地上天国のひな型として、異質な価値観を結び合う和の聖地としての平安郷建設は、どのような役目をになうことになるのでしょうか。ここで、昭和二十七年秋季大祭でお話しされた明主様の御講話から、神さまのお働きやご経綸を通して聖地建設の意義を学びたいと思います。

神仙郷もほぼ完成しました。ここが完成したということ、非常に大きな意味があるのです。大きいというと、つ

まり世界的の意味があるのです。神様は、地球の経綸……これは地球が始まって以来なのです。ちょうど〇に、^{マル}みたいなものです。あるいは池に石を投げるようなものです。それによって波紋が起るようなもので、最初は小さい所にやられる。それがだんだん拡がっているんな変化が起るのです。それで私はそういう意味のことを神様から教えられて、始終それをみていると良く分かるのです。で、いまから二〇年くらい前に……昭和六、七年ごろにいろいろ世界のそういった小さい型を見せられました。《中略》そんなような意味で、神仙郷ができたということは、やはり世界の最初の……いつも言う通り、地上天国の模型ができたのです。これがだんだん拡がって行って世界的になったときが、つまり地上天国になるわけです。そうするとここが拡がるに従って、今度は体的に……ここは霊の中心になるのですから、これが熱海に写るのです。ここが霊界の経綸で、熱海は現界の経綸になるのです。ですから熱海ができて、それからだんだん拡がるのに、現界的に拡がっていくわけです。

今度京都のほうにちょうど適当な土地が入ったのです。で、ここが「五」で、熱海が「六」で京都が「七」になるわけです。ちょうどミロクの形になるわけです。日本の国にミロクの形ができたわけなのです。で、京都はどこまでも日本的に造るつもりです。だいたい土地は一万八〇〇〇坪ですから充分とも言えるし、まあ神様がどうなさる

か分かりませんが、だいたいそれで理想的なものができるわけです。つまり、箱根が山で経へたてで火へひです。熱海は水へみずで緯へよこになって、それから京都が土へつちで平らです。ですから神様は、ちゃんと日本の国の良い所に、こういった所を造られたわけです。日本で、箱根に熱海、京都としたら、まず天国的の条件はすっかり備わっているのです。ですから、そうなつてからが日本の地上天国というのができるわけですが、まだまだそのごく初めです。初めですけれども、休みなくドンドン拡がっていきます。天国が拡がると地獄はなくなるのです。いまいろんな汚いものや悪いものは、みんな地獄のものですから……地獄を造っているものだからして、どうしてもそういうものはなくならなければならぬ。これから創造と破壊……創造されるほど破壊が始まる。《中略》壊し、焼かれ、片づけられますが、そういう大掃除がたいへんなのです。つまり世の終わりです。それはいつさいがそうなるのです。だから第三次戦争も起りましょうし、原子爆弾の撃ち合いもありましょうし、それから病気で片っ端からドンドン死ぬこともありましょうし、それで初めてきれいな世界になつて、そうして地上天国ができるわけです。

(昭和27年9月26日)

現在平安郷は、奥竹林の美化作業を進めています。コロナ禍以降、信徒皆さまのご奉仕の機会が滞ってしまったこ

ともあり、奥竹林は荒れた状態になってしまいました。ここは春秋庵の北東に位置する三千坪の竹林です。私たちは明主様の願われる地上天国のひな型の庭として建設してゆきたいと考えております。みなさまのご協力を心よりお待ちしております。

つづく

平安郷・奥竹林整備奉仕のご案内

日	時	作業内容
令和6年2月9日(金)～18日(日)		竹の伐採、運び出し、枝集め
令和6年2月23日(金)～26日(日)	10時入所 15時退所	※昼食持参(厨房への事前申込可) 作業着、作業靴、帽子、軍手
		申し込み 聖地直結の会事務局・北林まで

アリとハト

見ず知らずの人への親切を

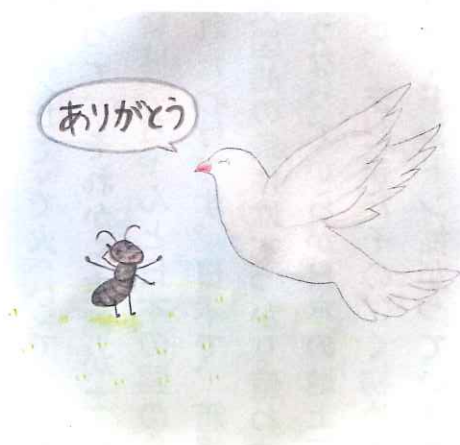
無駄と考えるはいけない

ノドの渴いたアリが池にやってきて水を飲もうとしたところ、足を滑らせて池のなかに落ち、溺れそうになりました。

すると、近くの木に止まっていたハトが、その様子をみて一枚の葉っぱをアリの側に落としてあげました。そのお蔭で、アリは葉っぱに這い上がることができ、岸にたどりつくことができました。

しかし、間を置かず、今度は池の付近を通りかかった獵師が、ハトをみつけて捕まえようとした。

それをみたアリは、さっきの恩返しをしようと、獵師の足に噛みつきまし



た。

「アッ！ 痛い！」

と獵師が叫び、体勢をくずしたすきに、ハトは無事逃げることができたのです。

前月号と同じ意味のお話です。「人助けや親切は人のためでなく、いつか自分の所へ戻ってくる。だから困っている人がいたら、助けてあげることが自分のためにもなる」ことをいっています。

明主様は『人を幸福にしなければ自分は幸福になり得ない』とおっしゃられ、さらに、私たちが「自然の法則」に逆らわずに従うことが「神様のみ心」だとみ教え下さっています。

日本の昔話に「笠地蔵」があります。雪の降る日に「寒かろう」と思って、お地蔵様に自分の笠をかぶせてあげたら、その夜にお地蔵様が大きな米俵を運んで下さったということです。自然の法則ですね、先月号で今年は親孝行をする実践として「よく笑いよく笑わせる」と書きました。親に安心感と喜びをもっていたことが目的です。

どうか自信をもって実践して親を喜ばせてあげて下さい。



ウグイスは春告鳥

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



No. 69 2024年2月15日発行

世界救世教 明主様と聖地に直結する会

